

2025年6月25日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 荒井正人



～～《報告》～～

小林 敏博

実施日：5月12日（月）
参加者：11名（後掲写真参照）

相変わらずの曇り空。休憩地点から先は城山山頂直下の急な登りまで 700mほど起伏の少ない遊歩道のような道が続く。道の両

- 10 さがみこベリー・ガーデン探訪
創立 30 周年記念祝賀会
編集後記・次号予告
- 11 会報の創立 30 周年記念号につい
ての皆さんへのご協力をお願い

脇はクマザサが広がっていて、花が開きかけたエビネの株がぼつんぼつんと登山道脇にあり、目を休ませしてくれる。稀少種の前には植生保護をお願いする小さな表示板があるので、その表示板があると足を止めて辺りを探したりした。

後を歩く富澤さんが「小林さん、ここだよ」との声に富澤さんのもとへ戻る。ちょうど1週間前、今回の山行の下見の際に学習の歩道で偶然に富澤さんとお会いして、ベニバナヤマシャクヤクが生えている場所を教えていただきスマホに保存してある、鮮やかに花開いた写真を見せていただいた。だが、その時には残念ながら見つけることができなかった。指差すほうを見ると、確かに葉を大きく広げたヤマシャクヤクがあった。ただ、時季が多少早かったせいで 1cm ほどの固いつぼみが先端についていただけだった。1週間前はたぶんつぼみもなく葉もここまで広がっていなかったと思われ、素人が見つけられなかったのはしょうがないだろう。



富澤さんによる要所要所での植物解説をうかがいながら 20 分ほど進むと城山への急な登りとなる。登山道脇には開花し始めたキンランが急坂の道を登りきるまでの間、眺めることができた。じきに勾配がゆるやかになり、薄いガスが流れる中を進むと城山～高尾山縦走路と合流する。水溜まりを気にしながら左へ少し登って城山の山頂に着く。

平日なのに山頂にはかなりのハイカーがテーブルで賑やかに食事を摂っていた。我々も空いたテーブルを見つけて昼食にする。風はないものの、少し肌寒い。うっすらとガスが辺りをただよっているが、突然ガスがクリーム色に明るくなった。向かいにすわる竹中さんが「日が差すと暖かいね」と言う。ガスを通してわずかに日が差してきたせいで、汗で濡れた肩から背中にかけて確かに暖かさを感じてほっとした。



後列左から：山内通、横関邦子、小部正治、富澤克禮、岡田陽子、小林敏博
前列左から：石塚嘉一、鳥橋祥子、中原三佐代、竹中彰、岡義雄

下山コースについて、岡さんや富澤さんから日影林道を少し下ると右手に城山～高尾山縦走路の北側に巻き道があり、人も少なく歩きやすいとのアドバイスを受けて、一丁平までその道を進み、萩原作業道を経由して日影林道を下ることにした。

城山山頂から日影林道を少し下って大きく曲がった先の道標に従い、右手の登山道に入る。道には小さな水溜まりがあるが大きな起伏もなく歩きやすい。巻き道はじきに縦走路と合流し、また縦走路から離れて巻き道に入ることをいく度か繰り返しているうちに一丁平に着く。途中、富澤さんの案内で巻き

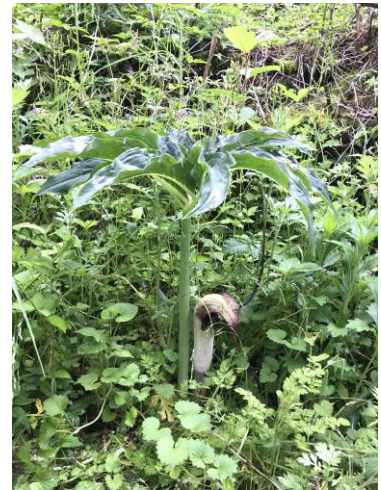
道を左へそれて大きな朴の木のもとに行く。開きかけた大きな白いつぼみや咲き終わりそうな花がいくつも枝に付いている。手の届くような近くの枝にはきれいに開花した花はなかったが、見上げるような大木をしばらく眺めていた。また、登山道に戻る足元にはかわいいヒメハギも咲いていた。

一丁平のトイレ脇から滑りやすい下り道を慎重に歩いて萩原作業道へ向かう。やはり富澤さんの案内でクマガイソウを見に行く。登山道からわずかに踏み跡のある斜面を、枝をかき分けて登ると数株のクマガイソウがあった。ただ、花の時期が過ぎてしまったせいか、唇弁はちょっとしぼんで茶色になっていたのが残念だった。一部崩落して改修されていない萩原作業道の入口には通行禁止の表示があった。小さな崩落の個所が途中にあったが、注意をすれば問題はなく、歩きやすい作業道から日影林道に合流する。

林道脇にウラシマソウがあるからと富澤さんに案内いただく。長くて大きな葉が広がり、その中にある5つ、6つの仏炎苞から黒っぽい“釣り糸”が長く伸びて垂れていた。こんなにまとまって咲いているウラシマソウを見るのは初めての経験だ。それも林道のすぐ脇にあることにさらに驚く。皆さんもそれぞれ覆いかぶさるように写真を撮っていた。

林道を30分下ると日影沢キャンプ場に着く。ここでじつくりと休んでからバスの発車時刻に合わせて日影バス停へ向かった。

タイトルにした『春の山野草を求めて』どおりに稀少種を含めてさまざまな花めぐりの山行を、講師・富澤さんのおかげで楽しく終えることができた。



行程：大垂水峠 10:55→10:25 急坂の上で休憩 10:30→11:50 ベンチ 11:55→12:25 小仏城山 13:00→13:20 一丁平 13:30→14:00 萩原作業道→14:10 日影林道 14:25→14:50 日影沢キャンプ場 15:20→15:30 日影バス停 15:43⇒16:00 高尾駅北口

大垂水峠～小仏城山山行に参加して

山内 通

大垂水峠バス停の登山口から登り始めました。朝までの雨でぬかるんだ所があり少し歩きづらく、ズボンの裾を汚さないようにと注意をしていましたが、下山時には泥だらけで思う様にはできませんでした。

城山から降りて来る方たちが「花がきれいに咲いてますよ」と言ってくださり、どんな花があるのだろうか、にわかの花好きになっていましたが「キンラン」と「ウラシマソウ」しか花の名前を覚えてなく、下山時に作業道の下で白い花が一面に咲いていてとても綺麗でした。最後は「浦島草」が固まって咲いているところがあり見たこともない形の花でしたので、とても印象深かったです。道路脇の見えないようにある珍しい花の咲いている場所を特定される富澤さんには驚きました。またそういう花のところに続く踏み跡があることも驚きで多くの人が花を見ているのだと思いました。



私にとっては今まで来ていた高尾山とは違う山行でとても新鮮でした。

城山へのキンランロード

中原 三佐代

1月に開催された谷中七福神以来の緑爽会山行の参加で、どなたが参加なさるのか分からずドキドキであった。高尾山口駅バス停で横関さんと会いドキドキが吹っ飛んだ。曇天だが歩くには適度な気候であった。

登山道の両脇にキンランが次から次へと現れる。城山への道にこんなに沢山のキンランが咲いているなんて知らなかった。加えてイカリソウ、エビネ、ホウチャクソウ、ニョイスミレ、ギンラン、、、。

写真を撮りまくっていた私は最後尾になり、先を歩いている皆さんの姿を追いながら「私もこの先何年も歩いていられるかな〜」「皆さん 凄いな〜」と思っていた。

お花や鳥のことを教えてくれる方、若かりし頃の登山の話をしてくれる方、登山道から外れた所に咲いているお花を知っている方。出会いの全てが私には嬉しく驚きであった。先輩方の姿はキンランに負けない輝きを感じた。

《呼びかけ山行報告》

あじさい山探訪

実施日：6月16日（月） 参加者：5名（文中に記載）

荒井 正人

今号は花にまつわる投稿が多く、山行報告にも花の名前が溢れている。そこに、もう一つ花の報告を載せたいと思う。鬱陶しい梅雨時、そんな時季の花といえば紫陽花になろうか。

武蔵五日市から徒歩40分ほどの谷筋に「南澤あじさい山」があり、1万5千株の紫陽花が咲き誇るという。所有者の南澤忠一さん（2023年に逝去）が、先祖の墓への路に紫陽花を植え始めたのは50年前のこと。畑で株を増やし、その先の谷あいにも紫陽花を植えた。今では名所となって、この時期に訪れる人が多い。どんなものか、呼びかけ山行として企画した。

武蔵五日市駅に集まったのは、大島さん、富澤さん、横関さん、小部さんと私。ちょっと出発が遅れたので、あじさい山の花を愛でてから金毘羅山を越えて琴平神社経由で戻る、ということにした。あじさい祭り期間中は入口までシャトルバスが出ているので、それを利用させてもらう。

バス代と入山料を払って山道に入り、「ちゅういっちゃんの畑」を右に見て少し登るとベンチがたくさんあり、その先すぐに南澤家のお墓がある。その辺りから両側はいろいろな種類の紫陽花の花が咲く群落地に入っていく。でも未だ花は3〜4分咲きといったところで、写真のように群落を見下ろす場所からも少し淋しい感じであったが、時季が良ければまた違った感想になるだろう。前日も雨だったので、足元は滑りやすい。「ここまで20年」「ここまで30年」と、植えた期間がわかる表示を見ながら登る。左側は沢で、それを渡る散策路もあるが、滑るためか通行止めになっていた。斜面が急になると、金毘羅山への尾根の一角に出る。休憩した後、私は足首と腰が痛くて自信が持てず、戻ることにさせてもらった。皆さんが山頂を越えて駅まで戻ってこられたので、合流後少し遅い昼食とし、歓談して解散とした。下見にはなったので、来年は花の状況を見極めて、また行っても良いかと思った。

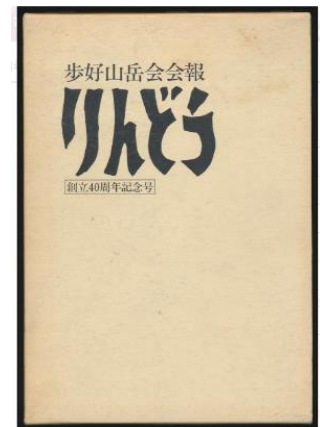


山の歌「ひとりの山」に想う (その2)

小清水 敏昌

標題については、2024年8月発行の会報No.193号にこの歌のこと及びこれに関わる学生時代の山の先輩との思い出などについて書きました。今回はその続編で、この歌の作詞作曲者である「持麿公英・もちざいきみひで」氏のことを中心にJACの図書室に調べに行ったり、またネットでも調査しました。それらについての報告です。

最初にネットで調べると、『山と溪谷』1973年9月号に持麿公英氏がいることが分かりました。そこでJAC図書室で同雑誌を見たところ、特集「中央線の山々ベスト8」の中に「乾徳山・黒金山」のタイトルで書いており、その所属が「歩好山岳会」と明記。これで少し手がかりが出来たかなと思いました。更に、ヤマケイの昭和50年前後4年分を調べてみました。当時のヤマケイには山岳会消息・山岳会会員募集・会報・文芸（詩、短歌、俳句など）のコーナーがあったので、氏の関係が載っているかなと考え各ページを辿って調べてみましたが、何も得られませんでした。しかし、『山と高原』を調べてみたところ、昭和36年3月号の「山岳界動静」のコーナーに「歩好会 りんどう 14-15号」の小さな表題で記事が出ており「豊島高校山岳部OB会で作っている会報で第14号：昭和35年12月、第15号：昭和36年1月発行」とあったので、持麿公英氏は都立豊島高校出身者ではないかと推測しました。これらの調査結果から、改めて日本山岳会の図書室の地道な保存機能は素晴らしいと感じました。一方で、会報の「りんどう」についてはネットで検索したところ、「日本の古本屋」に「りんどう 歩好山岳会 40周年記念号」が載っており、これを見ると「豊島高校山岳部・WV部OBG発行」とあり平成4年3月に刊行し値段は880円と表示。山の同人誌なのに古本屋で売っていることには驚きました。でもこれで、所属などについて確実なことが分かったと判断しました。



そこで、都立豊島高校のHPを開けると、現在の学校生活などが載っており部活動を見たところ山岳部はありませんでした。一方で、同窓会組織の「柏豊会」が示されておりアドレスが表示されていたので、思い切ってメールを出してみました。すると、4、5日経ってから同窓会の副会長の赤坂保明氏からメールが入り、持麿公英氏のご存命で名前の公英はペンネームであり「秀一」が正式な名前であることを教えていただきました。そして、持麿公英氏をよく知っている同高校ワンダーフォーゲル部OBの春田啓郎氏という方がいるので相談したらどうかとアドバイスをいただき、次の調査段階に進むことにしました。

ところが、何と運命的な展開が待っていました。春田啓郎氏にメールで連絡したところ、氏の父親が旧制松本高校山岳部出身で東大スキー山岳部にもいて、しかも日本山岳会の理事で機関誌「山」の編集長をしていた春田俊郎氏だったのです。これにはビックリしました。しかも、氏は「ネパールの蛾の分類・分布等の研究」で秩父宮記念学術賞を平成7年に受賞されていました。この学術賞は秩父宮王妃勢津子様の薨去によって同年に廃止されたので、氏が最後の受賞者でした。人との出会いは誠に面白いものですね。そして、春田啓郎氏の仲立ちで「ひとりの山」の作詞作曲者、持麿公英氏とこの6月に初めてお会いすることになりました。この続きは次号にご紹介します。

点名・壺里沢

南川 金一

点名・壺里沢とは、「壺里沢という名前の三角点が設置されている山」という意味である。三角点が置かれている山でありながら、無名峰であり、地元での呼び方もはっきりしない場合には、私は三角点の点名をもって山名としてきた。点名・壺里沢の場所は、尾瀬の入口である大清水の東方、群馬と栃木の県境尾根上で、物見山（毘沙門山）と燕巣山の間の 2098・7m 三角点のある山である。この説明で、頭の中に地理的概念を描ける人は相当に山を歩いている人だろうと思う。点名の「壺里沢」は、栃木県側を流れる一里沢から採ったものであろう。

この山へ行ったのは 2009 年 5 月で、県界尾根上の雪はかなり消えていて、藪が露出している部分はシャクナゲがうるさかった。尾根筋の東面には雪庇が残っていて、雪庇上を歩いたり、藪を分けたり、となった。物見山（毘沙門山）から 1 時間半ほど、三角点が置かれているとおぼしいピークに到達したが、標石は見当たらない。土中に埋もれている場合があるので、ピッケルの石突きを片端から地表面に突き刺してみても石の当たりはない。改めて 2・5 万図を調べてみると、三角点は頂上稜線の南寄りにあるように見える。念のため、緩く下っている南へ向かってみると、70~80m 進んだ先に、東に傾斜した裸地があり、片隅に基部を露出して傾いた状態の三角点標石が目に入った。それが 3 等点「壺里沢」で、先刻のピークから下った高度差は 2~3 ㎞程度と思われた。

家へ帰ってから 2・5 万図にルーペを当ててみて、疑問は解決した。県境を示す太い線と重なっていて気がつかなかったのだが、三角点の 3 ㎞ほど北に 2100m を示す等高線が小さく描かれていた。その地点が、点名・壺里沢の最高地点であり、標高は 2100m であることが明らかになった。

木暮理太郎は大正 9 年秋、燕巣山から北へ向かって歩いて、「三角点の標石があつて、櫓は横に倒れている。…最高点はずっと北寄りにあつて、二十米余り此所より高い…」と書いている（『山の憶ひ出』の「秋の鬼怒沼」）。標石はまだ健在で、測量時の櫓が倒れながらも残っていたことが分かる。すでに 5 万図「燧嶽」が発行されていて、当然それを持参したから三角点の存在は分かっていたが、1 ㎞ほど北の 2080m の等高線のあるピークを最高地点と考えたようだ。5 万図の時代であり、2・5 万図のように細かい読みができないことに加えて、藪に翻弄され、見通しが利かないとあって、歩いた距離や高度差の感覚が狂ってしまうことは避けられないことであつた。

最近の地形図では、「壺里沢」の標高を 2099・0m とし、そのすぐ北に 2100m の等高線が注記され、1 ㎞ほど北のピークに 2091m 標高点が注記されている。

「壺里沢」の標高が 2099・0m となったのは、国土地理院が現地へ行つて再測量した結果ではなく、三角点が埋設時のままの状態にあることを前提として、近い場所における GPS による測定値を基にした値であろう。点名「壺里沢」の現況が右の写真のように傾いた状態になっていることを、国土地理院は知らないのではないかと思う。根元の土が流されて標石が傾いただけでなく、盤石も見当たらなかったから、その標高は相当に変っているはずであり、基点としての役割を果たし得ない。こうした場合には、以前の国土地理院では標石を低下改埋し、再測量を行った。しかし、GNSS（全球測位衛星システム）測量の時代となり、三角測量の基点としての三角点の役割は終わった。



点名「壺里沢」の標石

奥只見の荘田エーデルワイス

吉田 理一

奥只見ダム湖を見下ろす小高い丘の上に電源神社が建立されている。戦後の復興には電力の供給が欠かせないと、国が 100 パーセント出資して設立された国策会社、電源開発(株)が 390 億円の巨費を投じて建設した奥只見ダム建設の殉職者が祀られている。殉職者全員の名前が記された慰霊碑の前には荘田幹夫博士が 1974(昭 49)年にスイスから持ち帰ったエーデルワイスが咲いて霊を慰めている。

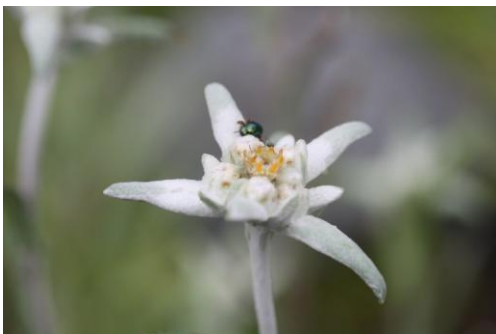


奥只見発電所は 1953(昭 28)年着工、1960(昭 35)年に竣工した出力 36 万キロワットの日本最大級の水力発電所である。

現地は標高 700 メートル積雪 5 メートルに達する日本有数の豪雪地帯である。工事完遂のためには冬期間の交通確保が最大の難関であった。その解決策として山間部にトンネルを掘って建設資材を輸送し冬期間も建設工事を進める計画が策定された。このトンネルは現在一般開放されている県道「奥只見シルバーライン」である。奥只見発電所の工事に伴う殉職者は 117 名の多きに達した。このうち 44 名は全長 22 kmのうち 18 kmがトンネルという難工事であったトンネル工事のための犠牲者である。犠牲者のうち 17 名は雪崩・凍死によるものだった。



荘田幹夫博士(1924 年～1974 年)は雪崩研究の第一人者である。北海道大卒業後恩師中谷宇吉郎の推薦で新潟県塩沢町(現南魚沼市)の国鉄雪実験所の所長を 25 年間務めたのち長岡市の国立雪害実験研究所長に就任した。土樽や枝折峠で日本初の人口雪崩を発生させそのメカニズムを解明し雪崩による被害防止のための方策を研究した。スノーシェッドは荘田博士の考案によるものと伝えられている。



荘田博士は雪崩研究の第一歩として、「雪崩文献」の渉猟から取り掛かった。日本山岳会永年会員の広瀬潔(大正 14 年入会・会員番号 931 番)は日本山岳会本部の書庫に案内したこともあったと「故 荘田幹夫博士との交友」で述懐している。

1974 年スイスで開催された「雪の力学シンポジウム」から帰国し、長野県白馬五竜スキー場で発生した大雪崩を視察のため出張の帰途、帰国してからわずか 2 週間後長野市内で病死された、まだ 50 歳の若さだった。

シーボルトとレンゲショウマ

西谷 可江

一度出会ったら忘れられない花がある。俯いて咲く蠟細工のようなレンゲショウマも、その一つである。東京都青梅市にある御岳山では、毎夏「レンゲショウマまつり」が催され、今年で 22 回目を迎える。日本山岳会東京多摩支部自然保護委員会主催の「観察会」も過去 11 回実施された。

ケーブルカーの終点「御岳平山上駅」前の茶店裏の薄暗い北東斜面が群生地である。私は三度訪れたことがあるが、カメラを構える人の列で細い散策路は、すれ違いのままならない程の賑わいであった。

御岳登山鉄道職員の話によると、「以前は人の手の入らない自然のままの鎮守の森で、レンゲショウマの自生地であった。当時は数も少なかったのだが、珍しい花だから観光に利用しようと、間伐や鑑賞用散策路の整備などで株数を増やして保全。今では 5 万株が咲き日本一の群生地と言われている」ということである。御岳山に続く大塚山で出遭った、一本だけ密やかに咲く姿も忘れ難い。



図鑑を見るとーレンゲショウマの命名者はシーボルトとツツカリーニ（シーボルトの助手）。自生地は、本州中部（福島県から奈良県）のブナ林やミズナラ林の下だけに見られる一とある。

私の愛読書・吉村昭の著作の一つ『ふおんしいほるとの娘』を以前読んで、青梅市とシーボルトの娘「いね」と関連があることを知った。また、青梅市の元市長・田辺栄吉氏（緑爽会会員・故田邊壽氏の兄君）の『市長随想』（昭和 61 年著）に、シーボルトと青梅市の縁について次のような記述がある。

- (1) シーボルトの娘「いね」の曾孫が青梅市在住
- (2) シーボルトが「ポッパルト市」（青梅市も姉妹都市）郊外に、身体の弱い妻の静養のため修道院を購入。5 年間過ごし、その間に有名な大著『日本』を著した。
- (3) シーボルトの弟子・本間玄調の末裔の本間昭雄氏が青梅市の盲老人ホーム「聖明園」の園長である。
- (4) 聖明園敷地内にある「医学文学館」にシーボルト愛用の薬籠が陳列されていた。
- (5) 本間玄調の有名な著書が、青梅市の地藏院に蔵書されている。

以上のような青梅市とシーボルトの縁を知って以来、「シーボルトは何処でレンゲショウマに出会ったのか」知りたくなった。

図書館で調べた結果、次の事実が判った。『シーボルトー日本の植物に賭けた生涯』（石山禎一著）に、「鳴滝の植物園に植えられていた植物が、どういうものであったか多少なりとも明らかになった。それを科別に整理して紹介すると、次のような植物が挙げられる。キンポウゲ科レンゲショウマ・カラマツソウ・アキカラマツ・モミジカラマツ」と記述があり、出島に植えられている 360 種のリストの中に、「水谷助六から送られた珍しい植物」とあり、キンポウゲ科にレンゲショウマの記述があった。

「水谷助六（1779～1833）は、名は豊文。父は本草家の水谷光和。名古屋の蘭方医・野村立栄につ

いて学び、後に小野蘭山の門に入る。尾張藩薬園の御用を務めた。尾張・伊勢・近江・信濃・飛騨・紀伊・加賀などに亘り採薬のため実地踏査をし、自邸には草木 2000 余種を栽培した」とある。

これにより、水谷助六がシーボルトにレンゲショウマを送ったことが判った。

1826 年、143 日に亘るシーボルトの『江戸参府紀行』を読むと、「水谷助六はシーボルトの江戸参府旅行の途中、熱田宿に迎えて互いに植物学上の知識を交換。シーボルトは、この地方の珍しい植物採集を彼に依頼し、助六らはシーボルトが日本を去るまで実に熱心に中部日本の大変珍しい植物を探し、乾燥させ写生する仕事に携わった」と記述されている。

シーボルトと御岳山のレンゲショウマを結びつけたかった私の思いは妄想に終わったが、事実を究明することができた文献・記録に感謝・感動する幸せな日々であった。

この夏は、久し振りに御岳山のレンゲショウマに会いたい思い頻りの此の頃である。

田邊壽さんを偲ぶ

山川 陽一

「天の上に人を造らず天の下に人を造らず」これは福沢諭吉の著書『学問のすゝめ』の冒頭の一節ですが、慶応義塾では先生を先生と呼ばず「さん」付けで呼びなさいと教えられました。私にとって田邊先輩は天上人みたいな存在でしたが、塾の教えに従っていつも通りナベさん、いや、ここでは田邊さんと呼ばせていただきます。

田邊さんは私が大学に進学した年に大学を卒業されましたが、慶応高校山岳部は大学の体育会山岳部の指導下にありましたので、最初に田邊さんと出会ったのは高校時代でした。当時の大学山岳部は JAC の会長も務められた宮下秀樹さんを筆頭に田邊さんなど日本の山岳界を代表する錚々たるひとたちがそろっていましたが、臆することなく仲間たちとご自宅におしかけた

りしたものです。70 年も前のことですから記憶も定かではありませんが、田邊さんに連れられて初冬の南アルプス赤石岳の避難小屋で一夜をすごしたときのことです。濡れた靴をたき火で乾かしているうちにうたた寝して焦がしてしまい、えらく叱られたことだけ覚えています。

2005 年の慶応山岳部 90 周年記念登山で中国奥地チベット自治区の未登峰カルシオン登山隊で一緒にさせてもらったのもいい思い出です。

田邊さんは、山歴は勿論、ビジネスの世界でも勇名を馳せました。山で培われたリーダーシップとその人格がなせる業だったのでしょ。

仕事をリタイアされてからは趣味に生き、スケッチクラブの山の絵展では個展も開かれて素敵な山の絵と添え書きに魅せられました。

緑爽会で多摩川の河原でバーベキューを楽しんだのを覚えている方も多いと思います。

飾らない人柄、みんなに親しまれるあの笑顔をもう見ることができないと思うと何と申し上げていいのか。

謹んでお悔やみを申し上げます。合掌



カルシオン登山隊で（右はガイドのハンさん）

＜田邊壽（たなべひさし）さん略歴＞

2025 年 3 月 14 日逝去、享年 93 歳。青梅市出身、慶応義塾大学法学部卒業。1956 年三越に入社。大学時代は体育会山岳部で活躍され、卒業後も登山活動を継続し、JAC ヒマルチュリ登山隊、エベレスト南西壁登山隊に参加。1960 年には慶応義塾創立 100 周年記念登山でヒマルチュリ（7864m）に初登頂した。

経済界では三越退社後、ダイエーグループの役職、オ・プランタン・ジャポン社長、福岡タイエーホークス社長を歴任。マルコーの更生計画終了以降はすべての役職を辞し、趣味の絵画で新しい道を拓かれました。

～～《予告など》～～

さがみこベリー・ガーデン（SBG）探訪

新しい取組みが始まっている SBG を見学しバーベキュー。ブルーベリーは摘み放題、食べ放題。

- ・日時：7 月 14 日（月）
- ・集合：中央線「相模湖駅」改札 8 時 40 分（9 時発の「三ヶ木」行バスに乗ります）
※ベリーガーデンに行くバスは「三ヶ木」バスターミナルから 10 時に出発しますが、
橋本からよりは相模湖からの方が混まずに行け、スーパーでの買出しができます。
- ・参加費：6500 円（入園料、食材、帰りのタクシー代込み。残金があれば返金します）



お申込みは右記へ 横関邦子
荒井正人

創立 30 周年記念祝賀会・・・30 周年の区切りとしてささやかにお祝いの会を開きたいと思います。

- ・日時：9 月 18 日（木）12 時～14 時半
- ・場所：主婦会館プラザエフ（四ツ谷駅前）3F「コスモスの間」
- ・会費：6000 円

※当日、席上で会報記念号を配付予定です。

―― 編集後記 ―――

最近の気候は梅雨入り、梅雨明けが以前ほどハッキリしません。昔は梅雨明け十日を狙って夏山の計画を立てたものでしたが、今はどうなのでしょう。梅雨寒なんて言葉もないくらい、いきなり猛暑日やって来るなど、昔とは違った体調管理が大切になります。そんな時期ですので、記念号の編集に向けては体調管理が大切だと心しています。皆さんからの一文をお待ちしています。（荒井正人）

1ヶ月前に我が家の1階軒下に小さなシャワーヘッドのようなアシナガバチの巣を見つけた。今では2匹が羽化して女王バチと巣を守っているが、昨夜、道を隔てた向かいの家の方がわざわざ知らせてくれ、獐猛なスズメバチとの違いを説明してお帰りいただいた。都会の中の自然の営みを楽しんでいたが、盛夏に向け巣の処置をどうしたらよいのだろう。（小林敏博）

テレビのニュースで夏休みの過ごし方のインタビューしていた。旅行が大人気だけれど地球や人間にとって大切な「土」に触れてほしいと思う。キンラン、レンゲショウマ、エーデルワイスなどの美しい花々、美味しい食べ物などアスファルトやコンクリートでは成長しない。最近、「古米」「古古米」と言いながらいろいろな疑問を感じている。（横関邦子）

次号予告＜8 月 25 日発行の主な内容＞ 皆様からの投稿をお待ちしています。

さがみこベリーガーデン探訪報告、南川さんの連載、小清水さん（その 3）など

会報の創立30周年記念号についての皆さんへのご協力をお願い

荒井正人

先に標記のお願いを郵送あるいはメールでお送りしました。この会報がお手元に届くのは（最近の日本郵便は配達に時間がかかりますので）月末になるかと思います。そうすると「記念号」の原稿締め切りまでは20日ほどしかありません。それで、会報にも再度お知らせ、お願いを掲載することといたしました。

「記念号の発行」については、会員の皆さんのご協力なしには実現しません。

皆さんに一言書いていただきたいのです。「何を書いたら良いかわからない」、「書くのは苦手」という方もあると思います。論文ではありませんから、どなたかに手紙を書くようなつもりで、緑爽会のこと、ご自分の登られた山のこと、近況でも構いませんので、書いて返送してください。

それと写真ですが、顔写真は嫌だという方もあるかと思います。個人的には、中々お会い出来ない遠方の会員の方は出来れば顔が判る写真がいいなと思っています。何しろ写真の大きさは次ページに載せたような大きさですので、身体全体が入った写真では顔が判別できません。その点よろしく願いいたします。

さて、今考えている30周年記念号の構成は以下の通りです。発行は9月14日の創立記念日で、臨時の発行ですが、これがちょうど200号となります。

- ・会報の体裁は通常号と同様とします。（次ページの表紙は参考イメージです）
前半部分は、その時の報告や寄稿・投稿で、いつも通りです。
- ・ただ、後半部分は、皆さんからの文集のような形となります。「会員からの一言」に文章をお寄せいただきたいのです。（そのイメージは次ページ）⇒①原稿返送のお願い
- ・文章のテーマは自由です。「緑爽会に入会して」とか「緑爽会の思い出」など、会に関係することでも、「心に残る山旅」「もう一度登りたい山」「私の好きな山」など山のことで良いでしょう。近況のように身近なことを書いていただいても構いません。
- ・郵送でお送りした会員＝文章の長短は問いません。お送りした原稿用紙に、出来れば1枚は書いていただきたいのですが、半分（200文字）でも結構です。最長で4枚ですが、書き足していただいても構いません。（縦書きでも横書きでも可。パソコンで作成されてもOKです）それを返信用封筒で郵送して下さい。
- ・メールでご依頼した会員＝メール本文でも、お送りしたワード原稿用のテンプレートに書いて、メール添付で送っていただくことでも構いません。ただし、写真は別のデータとして送ってください。
- ・併せて、皆さんの②顔写真を送っていただきたいと思います。前述の通りです。

そしてこの「一言」を、できれば緑爽会入会順で掲載したくと思いますが、これがよくわかりません。これまで返送された方の中には、明確に何年何月と書いていただいた方もあれば、何年頃という方もおられます。そこは分かる範囲で結構です。郵送した方は③回答票を同封してください。メールでご依頼した会員はメールに記載してください。祝賀会への出席可否もよろしく。

8月に諸準備やパソコン作業を行う予定です。なるべく早めにご返送いただけると有難いです。次ページの「会員からの一言」は、恥ずかしながら荒井分をサンプルとして載せました。

会員からの一言

10年前のことを思い出して



荒井正人

15379

緑爽会には 2013 年 JAC 入会と同時で、図書委員会と共に入会させていただいた。山行や講演会に参加していくうちに多くの大先輩方を知ることとなった。平野紀子さんもそのお一人である。

余り行事に参加しないうちの 2015 年 5 月下旬から、尾瀬の見晴にある原の小屋で働くことになって、長ければ 10 月の小屋閉めまで会の行事には参加できなくなった。でも尾瀬便りのような文章を会報に書かせていただいた。向かいにある第二長蔵小屋の支配人を平野さんからご紹介いただいて挨拶に行ったように思う。

小屋の仕事は 65 才の前期高齢者には厳しいものだったし、腰が痛くなって、あえなくお盆の頃でリタイアした。小屋には申し訳なかったけれど、大変貴重な体験だった。

いま、鳩待峠に星野リゾートが「Lucy」とかいう山小屋（ホテル？）を作っていて 9 月から稼働するそうだ。当時、私が働いていた時にボッカとしてデビューした「マサト君」は、いま、ユーチューブで「ジャパニーズ・ポーター」というシリーズ物を沢山流していて、あー、マー君頑張っているんだと思うし、時々当時すでにベテランだった先輩の顔を見つけては懐かしと思う。

ボッカさんなしには小屋の食事は成り立たない。Lucy は車で運べる食材をふんだんに使って、洒落たリゾートホテルにしようということなのだろうか。時代の流れとはいえ、尾瀬には相応しくないような気がするし、色々な面で先々が心配である。

.....

上記はサンプルです。写真は右のような身体全体が写っているようなものでも結構ですが、顔が判りません。背景で何かをしているところを見てほしい、ということがあれば、出来る範囲で工夫致しますが。

そして、こうした文章が下記のような感じで（これは見開いたところ）掲載されることになります。表紙もイメージです。

ぜひ、みんなで創る記念誌にご協力をお願いいたします。

（ご不明な点がございましたら、荒井までお問合せください）

